

これはゾンビですか？  
～いいえ、必死に生きて  
ます～

きやないんこ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は天界人だ。そんなこんなで始まるこの物語。天界から落とされた天界人、神崎聖悟は普通の人間である相川歩の家に居候していた。何の不自由もなく、普通に暮らしていたある日、ネクロマンサー、ユーと出会う。そこから彼の生活は一変し、天界人に命狙われたり、天界人に命狙われたり、メガロと戦ったり……。しかし、彼には守るべきものが無かった。この物語は、そんな天界人が、守るものを見つけようと頑張って生きる、そんな物語……と信じていたきたい。

# 目次

銀髪少女と変態くん＋俺

—

1



# 銀髪少女と変態くん十俺

どうもはじめまして、主人公の神崎聖悟と申します。

実は俺、人間界の人間じゃない。何言つてんだつて思つかもしれないがこれが事実である以上仕方がないんです！ではどこの世界の人間だということになるので初めに言うことにします。俺は天界人です。付け加えて、『剣勇伝説〇A I B A』の『霸王剣』持ってます。

「おーい、聖悟、大丈夫か？」

「あ、わりい歩。ちよつと眠くてな。」

今話しかけてきたのは相川歩。ただの人間だ。俺が小さいころ天界から落とされて、住む場所を探している時、快く受け入れてくれたのが歩だった。ということ、俺は今、

相川家に住んでいます。

ちなみに今は深夜1時ごろで、俺たちは近くのコンビニへ向かっている。で、今着きました。

「歩、今日は何を……。」

そこまで言つて、俺は言葉を止めた。歩がコンビニの方をぼーっと見ていたからだ。

「歩、どうした?」

俺は、歩と同じ方向に、目を向けた。そこで視界に入ったのは、まるで、幻想のように綺麗な一人の少女。その少女は歩に目を向けている。つてか、完全に歩の心はその少女にとらわれてしまったようだ。ずっと見ている。

しばらくして、歩は少女へ向け足を進めた。まさか、あいつあれをやる気かつ! やめろお!! それは禁断のおおおお!!!

「すいません。もののけ姫って信じますか?」

ああああああ!! やつちまつたああああ!! あいつ、なんで織戸の言葉なんか信じちやつたんだよ!! ああ! 目え逸らされてるし!! っておい、まだ何かやる気なのか!? もういいよ!! ロンダートからのムーンサルトで高得点狙おうとしなくていいからっ!!

ぐきっ

案の定、歩は失敗し、足首から落下。その結果、足首から嫌な音がした。

「はあ……もう見てらんねえ。」

俺は見てられなかったの、というかなんか恥ずかしくなってきたんで、コンビニへ入り漫画を立ち読みしたり、漫画を立ち読みしたり、漫画を立ち読みしたりしながら暇をつぶしていた。

しばらくして俺はコンビニの外へ出たが、そこに歩はいなく、来た時と同じく、少女が一人ぼつんと座っているだけだった。違うところがあるとすれば少女の周りにメモ用紙が数十枚散らばっていることぐらいだ。

「なあ、さっきの奴どこ行つたか知ってるか？」

俺は少女に聞いてみる。

『家に帰つたはず。』

あんやろー、この子と話してて俺のこと忘れていきやがつたな？よし、帰つたら半殺しにしようかな？それとも苦痛を何時間も味あわせるか？

そんなことを考えているとシャツの袖がくいと引っ張られた。

『あなたは何者？あの人の友達？』

……友達、ではないよな。



「あいつは、友達って言葉じゃ表せないよ。ま、しいて言えば『家族』かな？」

『そう。それで、あなたは何者？』

うーん。この少女に話していいのだろうか？でも嘘はいけないし……。歩にも言っていないけど……。よし！思い切って言ってみよう！！

「俺は……天界人だっ!!!」

『天界人？』

あれ？意外と反応が薄い……。

「そ、天界人。天界に住む人間だ。もつとも、小さい頃に親に人間界に落とされたから、天界がどういうところかは知らないけどな。」

『なぜあなたは捨てられたの？』

「おそらく、俺の力は強大すぎたからだ。いや、強大っていう言い方はおかしいな。ま、人から嫌われるような能力だったってことは確かだな。」

『あなたは、私と少し似ているかもしれない』

「そうかね？あ、そういやあいつ、どうだった？」

『バカだった』

「同感です。」

『そして、変態だった。』

「確かに。」

は……歩くボロクソ言われてっぞ。

『でも、優しくて面白かった。』

驚き。でも……

「それも同感っす。」

そこまで話して少女はいきなり立ち上がった。

「どうしたんだ？」

『私はあの人の運命を変えてしまった。だから、助けなければならない。』

言ってることがようわからん。

「とにかく、どっか行くのか？」

少女は小さく頷いた。あ、そうだ。名前聞いとかないと。

「じゃあ、名前だけでも教えてくれ。一応俺も教えたしさ。」

『ユークリウッド・ヘルサイズ。冥界人。』

じゃあ、ユーだな。うん、そのほうが呼びやすい。

「じゃあなユー！気をつけるんだぞー!!」

ユーはもう振り向かなかった。

さて、俺もそろそろ帰ろ。そうして俺は帰路についた。

帰りながら俺は気づいた。

はっ!!ユー、冥界人って言ってたよね!?!ってことは、ユーもこの世界の人じゃなかつ

たんかいいいいいい！！！！

しばらくして、ユーと歩が家に帰ってきた。え？二人が帰ってくるまで何してたかって？イ〇ズマイレブンのレベル上げですけどそれが何か。

「おい、お前は家族の腹が血だらけでも大丈夫なのか？」

「死んでなきや大丈夫でしょ。」

「一応死んでるんだけどな。」

は……何を言っとなるんだこいつは。

「ホントかよ？じゃあ、なんで動けんだよ？お前はゾンビか。」

「まあ、そんなところだ。」

マジかよ。

「あ、そうだ。この子が俺を生き帰らせてくれたんだ。名前は……」

え？あれ？さつき会ったね、アンタ。

「ユー……」

「そうそう、ユーって言うんだって、なんで知ってたんだ、聖悟!？」

『私が生き返らせた』

そういえばユー、最後に自分は冥界人って言ってたな。あくなるほど！ユーはネクロマンサーだったってわけか。

「で、なんでここにいるんだ？」

『彼は命を狙われているかもしれない。私も命を狙われている。だから一緒にいたほうがいいと思った。』

「なるほどね。」

「でも、聖悟は何も出来ないんじゃないか？普通の人間だし。」

「いや、歩。実は俺はこの世界の人間じゃないんだ。」

「え？じゃあ、なんなんだよ、お前。」

「実は……天界人なんだ。」

「なんだ？その、天界人ってのは？ようするに、天界に住んでる人ってことか？」

「うん、まあそういうことだ。」

そこまで話して俺はあることを思い出した。

「あ、歩。コンビニで俺のこと忘れてったろ。だから今、一方的に殴らせてくれねえか？」

「え？いや、俺、殺されたばっかなんだけど？」

「大丈夫。ゾンビだろ★」

拳を強く握りながら歩み寄る。

「なあ、ちよ、待て。落ち着け！星がつ！星が黒いつて!!」

「問答無用!!!」



「ぎゃあああああああああああああああああ  
」

『天罰』

!!!!!!!!!!!!

静かな夜にゾンビの叫びがこだました。

すいません。そういうの、近所迷惑なんでやめてくれませんか？